

22 DIY のススメⅡ

～ヒヤリ・ハット対策として～

諏訪赤十字病院 臨床工学技術課 森本 学 宮川 宜之 他9名

透析センター 五十嵐 美都子

腎臓内科 立花 直樹 笠原 寛 小口 寿夫

透析患者数の増加に伴い透析現場では、業務の効率化、感染防止対策の徹底、医療安全対策の実施など様々なものが求められてくる。ツールもそのひとつである。各メーカーから様々な製品が作られているが、環境の違いなどからその施設に適した製品を見つけ出すことは難しい。そこで、私たちは当院の環境に適したツールを考案・作成している。今回は使い捨て薬剤札とプレーカーカバーを紹介する。

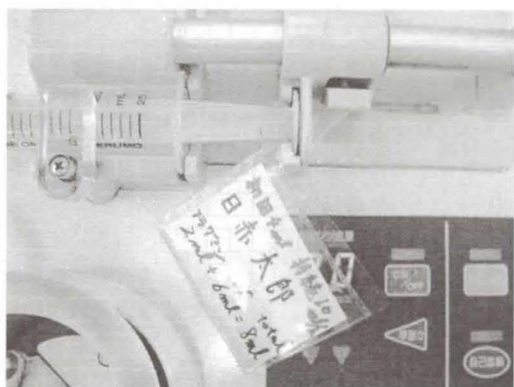


図1：以前使用していた薬札

【専用使い捨て薬札】

図1のように以前使用していた薬札は手書きで見ずらく、そして患者ごと使い回していた為、感染対策が不十分であった。さらに透析終了後、薬札を回収し、薬剤の種類ごとに仕分けする作業が必要なため業務が煩雑化していた。また、ドクターからの抗凝固剤や注入薬の指示変更により薬札を書き直す作業が必要であったり、集中監視システムの指示書では薬剤が変更されていたが、薬札が変わっていないことがあり、ヒヤリ・ハットの原因につながった事例も経験していた。

森本 学 諏訪赤十字病院臨床工学技術課 〒392-8150

諏訪市湖岸通り5-11-50 TEL0266-52-6111

そこでディスプレイで見やすく、集中監視システムとデータを一元化した薬札を考案、作成した。(図2)



図2：使い捨て薬札

印刷方法は集中管理システムから患者の薬剤注入に必要なデータのみを抽出して、専用プリンタによりシールに印刷する。印刷用のシールは、台紙を全てはがせばシールの全体をソフトバックなどの薬剤に貼ることも可能であり、また、台紙の上1cmに切り込みが入っているので、その台紙だけをはがし、薬札をシリンジに貼りシリンジポンプにセットしてもシリンジの目盛りが隠れないようになっている。(図3)

薬札を印刷する専用のプリンタは、一枚ずつ切れた状態で、薬剤の種類ごと印刷されるので、薬札を仕分けする作業が必要無くなった。

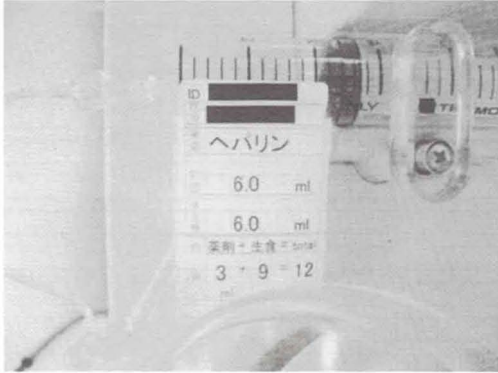


図3薬札をシリンジに貼った状態

【専用使い捨て薬札を使用した結果】

新しい薬札を使用した結果として、まず、集中管理システムからデータを抽出する為、指示書と薬札のデータを一元化することが可能となった。

次に薬札には薬剤の注入に必要な情報をワープロにより表示されている為読みやすく、読み間違えなどによるヒヤリ・ハットも減少した。

また、薬札をディスプレイに貼ったので薬札を通した感染の危険性がなくなった。

そして、専用のプリンタを使用しているので薬札を仕分けする作業がなくなり業務の効率化を図ることができた。

問題点としては、若干コストがかかることである。専用のシールは特注品であり、プリンタも専用のものである。しかし、コスト以上の業務の効率化、感染防止や医療安全などの効果は得られていると考えている。

【ブレーカカバー】

当院の透析室では、毎年数件、透析中に透析装置のブレーカが落ちるヒヤリ・ハットを経験している。原因としては、不穏な状態の患者によってブレーカを落とされる、患者の荷物が落下してブレーカを落とされるなどであった。

当院では東レメディカル社製の2000MV、3000M、日機装社製のDBB72、DBB73、DBG02といった透析装置を使用しているが、そのほとんどが、透析装置の後ろにブレーカが剥き出しの状態、なおかつ患者がベットに横になると顔の真横で、手を伸ばせばブレーカを簡単に落とすことができる位置にブレーカがある。(図4)

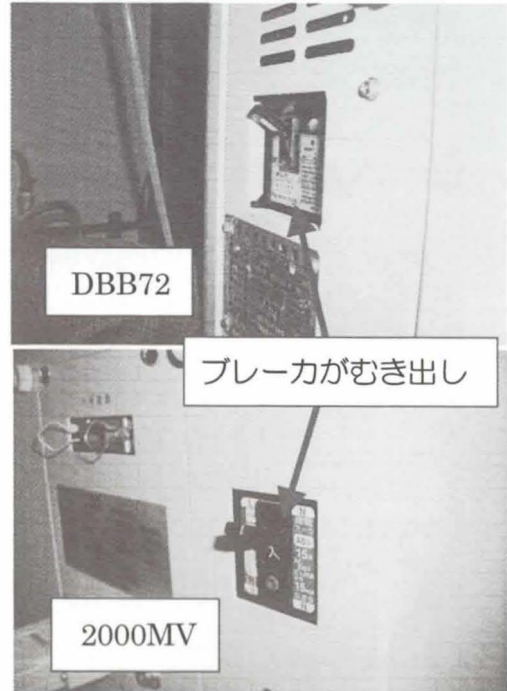


図4当院使用の透析装置のブレーカの位置

当院ではこの位置でカバーがついていないブレーカがあるのは問題があると考え、各メーカーにブレーカを守るカバーなど付属品が取り扱っているか問い合わせたが無いため、ブレーカを保護するカバーを考案、作成を依頼した。

図5にブレーカカバーをつけた状態を示す。

ブレーカカバーはブレーカの状態がわかるように透明なアクリルで作成した。また、東レメディカル社製の2000MV、3000Mのブレーカカバーは底面をねじで固定してあるが、異常事態のときスタッフがすぐにブレーカを扱えるように、患者から遠い側面は何も被わなかった。日機装のDBB72やDBG02のブレーカカバーは全面をアクリルで囲ってあるが異常事態のためにカバーをマグネットで固定し、着脱が簡単に行えるようにした。

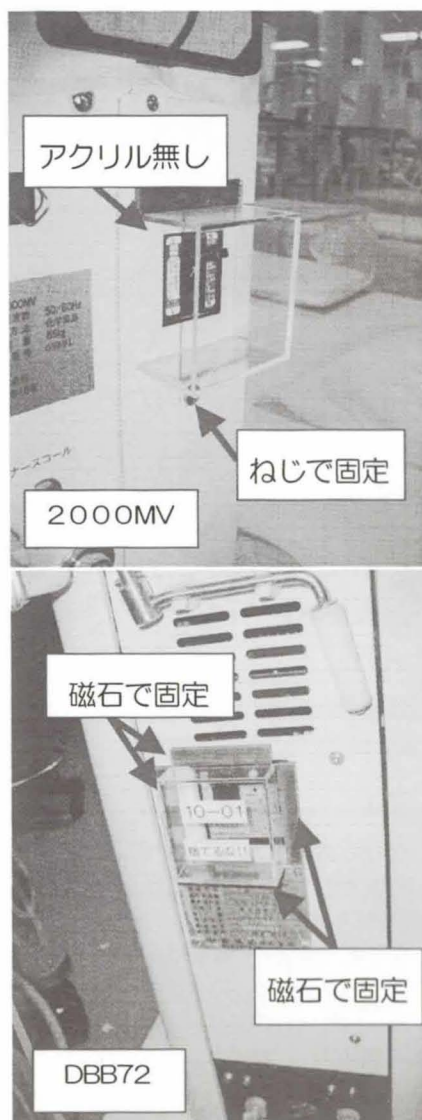


図5 プレーカカバーを装着した状態

【プレーカカバーの結果】

プレーカカバーを取り付けて1年程度経つが、現在のところ治療中に患者によってプレーカが落とされるといったヒヤリ・ハットは起こっていない。

当院の考えとしては、プレーカがこの位置にあるのは設計に問題があったのではないかと考えている。さらに、プレーカを保護するカバーなどの付属品が無いということに疑問が残る。今後、新製品などには改善を期待する。

【全体のまとめ】

各施設の環境にあったオリジナルの製品を作成、使用することは有意義で、アットハットの減少に役立てることが可能である

また、メーカから既製品を改良したり、オリジナルの製品を使用して医療事故が起きた場合保障をしないと言われるが、既製品を使用して医療事故が起こったとき完全に保障してくれるかは定かではない。そこで既製品を改良したり、オリジナルの製品を使用することによって医療事故を減らしたり、無くすことができるのなら、安全面を十分に考慮したうえで、より各病院の環境に合わせたオリジナルの製品を作成・使用する必要がある。